

専門学科の併設する高校における連携の重要性について

—ハイスクールブランド創出事業から、商工連携モデルを工業科目線で提案する—

森山 龍夫*¹・松岡 敬興

The Importance of a Partnership in Specialized High Schools :
Technical team propose the collaboration model between commercial and technical high school from the point of view
of a high school brand produce project

MORIYAMA Tatsuo *¹, MATSUOKA Yoshiki
(Received December 18, 2020)

キーワード：地域連携教育、テーマ型コミュニティ・スクール、高等学校、工業科

はじめに

本年度(2020)、山口県の教育施策である「教育を通じた「ふるさと山口」創生プロジェクト」の一つである、やまぐちハイスクールブランド創出事業が展開されている。専門高校等において、新たな価値の創出につながる教育活動を展開し、「Society5.0への対応」と「地方創生に資すること」ができる人材の育成を図る取組である。県内専門高校等(9つの専門学科等)において、学科の枠を越えた協議により模擬会社を設立し、企業等と連携しながら、一連の企業活動の実施や商標の考案など、新たな価値の創造につながる教育活動を展開している。

本取組で重要なのは各専門学科の連携である。しかし、高校の統合による専門学科の併設の形を採る高校が増える中で、同じ高校内に併設されている各専門学科との連携が積極的に行われているようには見受けられない。実際に、県内の専門学科が併設する高校に学科を越えた連携活動についての聞き取りによると、学科を越えた連携の必要性は感じているものの、なかなか実現されていないという返答に終始した。学科を越えた連携活動の難しさを感じている指導者が多いのが現状で、どのように連携活動をすればよいのか模索している様子が推測できる。

山口県は今年度、コミュニティ・スクールの導入が高校においても100%となり、各高校が特色を活かしたテーマ型コミュニティ・スクールの施策が展開されている。各専門高校の特色を最大限に引き出すためには、専門学科の併設校において各専門学科の連携が必要であると考えられる。

県内の専門学科の連携を強めながら活動するハイスクールブランド創出事業の活動に携わった経験から、今後の専門学科の連携の必要性について、どのような活動が生徒たちの学びとなるのかなどを考察しながら、商工連携モデルについて、工業科目線で提案する。



図1 ハイスクールブランド事業
(出典：山口県教育推進の手引き)

*1 令和元年度入学 山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻学校経営コース

1. 目的

今回の実践活動を通して、本校に併設されている工業科と商業科の連携の重要性を「商工連携モデル」を示すことで、専門学科の併設する高校における連携の重要性について提案する。また、地域連携教育の実践活動から見取れる生徒の変貌や、地域連携教育を工業科「課題研究」取り入れることで、工業科における「課題研究」の授業改善の必要性を示す。

2. 方法

ハイスクールブランド事業の実践活動を工業科の取組を中心に示す。その活動の中での生徒の変貌を見取り、商工連携を図ることで得られる教育効果を検証する。また、活動後のアンケート結果を基に検証を行い、二つの検証結果から、地域連携教育における専門学科の連携の重要性を「商工連携モデル」を用いて示していく。

3. 山口県立防府商工高校の紹介

本校は9年前に防府商業高校に機械科が新設され、防府商工高校と名前を変え現在に至る。本校の特色としては、地域連携教育において積極的な学校で、機械科設置前の防府商業高校時代から「幸せます」を中心とした特色ある活動が行われてきた。商業科は科目の特性を活かし、学んだことを生かした活動が展開されている。地域連携教育がカリキュラム化されており、「総合実践」や「課題研究」の授業において、防府市役所の模擬職員の任命、菅公みらい塾の取組の参加、本校一番の催しである天神まちかどフェスタ開催など、防府市役所や防府市商工会議所と連携を図り、「私たちが地元に貢献できることは何か」をテーマとした活動が展開されている。一方、後発となる機械科は、まだまだ特色ある活動が少ないのが現状である。機械科の科目の特性を考え、目的意識の高い特色ある地域連携教育を模索し、さらにその活動が生徒の学びにつながる活動になるようにと考えている。

4. 実践活動について

活動のメインは防府市動物愛護団体主催「犬猫の譲渡会」であった。この活動について工業科と商業科の生徒が一緒に考え、連携しながら活動を展開することが目的であった。工業科の役割は、その譲渡会に使われる古民家のバリアフリーについて意見交換をしながら、バリアフリー化に着手することである。今回の活動を、工業科の活動を中心に紹介していく。

4-1 活動内容について

古民家のバリアフリー化の活動は約3週間の活動となった。各工程と活動内容を表に示す。各工程の生徒の活動の重要部分については、下線を引くこととする。下線部は、2-2生徒の見取りの考察につながるものとなる。

表1 古民家再生の活動工程と活動内容

活動工程	活動内容
1. 現地調査	古民家へ行き現地調査。生徒と教員とが現地調査後に現地で意見交換。
2. 廃材利用	解体現場でインターロッキングブロックを譲ってもらう。
3. 階段1の製作	土間から居間へ上がるための階段の製作。段差と使いやすさを重視。
4. 床の製作	インターロッキングブロックの敷き詰め作業。
5. 階段2の製作	ブロック敷き詰め後、入り口と床の差が大きくなったために計画変更。
6. バリアフリー意見交換	宇部西高校の生徒とバリアフリーの意見交換。
7. 商業科の取組を知る	商業科の取組の手伝いを行う。お互いの活動を知る良い経験。

4-1-1 現地調査

古民家は元印房店であった。店舗に入ると広い土間があり、店舗内に設置されている階段を上ると座敷につながる。土間はコンクリートが敷かれているがところどころ割れており、割れた部分には砂利が敷かれている状況であった。設置されている階段の段差が土間と一段目の差が非常に大きく、高齢者や障がいを持つ人たちにとっては使いづらいものとなっていた。今ある階段を使うためには、一段目の段差を軽減する必要があると考えた。現地調査から、生徒と担当教員で話し合いを行った。話し合いは今設置されている階段をどのように活用すればよいかを中心に進んでいたが、もっと視野を広げていろいろな意見が出始めると、ある生徒が「土間の修復がバリアフリーにつながるのではないか。」と提案する場面もあった。実は、この意見をきっかけにバリアフリー化に向けてどんどんと活動が広がりを見せた。話し合いの段階では、すぐの対応はかなり難しいということとなり、時間をかけて今後の課題として取り組むこととした。このように、話し合いから活動の幅が広がった。また、意見交換を行うことで、参加者全員がこの活動を自分事とすることができたのではないか。

4-1-2 廃材利用

土間の修復については、ハイスクールブランド創出事業の予算の関係上、今年度の修復はかなり厳しい状況で、来年度以降の取組となることを見通した。しかし、ある機械科教員が話していた「店舗解体途中の現場があり、店舗に使われていたインターロッキングブロックの材料をもらえたら古民家に再生できるのではないか。」という情報から、直接現場に行き解体業者に活動の趣旨を伝えると、それらを譲ってもらえることとなった。

実際に解体現場に生徒と同行し、インターロッキングブロックを譲ってもらった。生徒たちは、業者の方からインターロッキングの仕組みを学び、作業のアドバイス等もらった。いろいろな技術を教えてもらったことがとてもうれしかったと生徒たちは喜んでいて、業者の方も生徒たちの頑張りを察し、協力してくれたことにとっても感謝している。

4-1-3 階段1の製作

現場を見て何を考えたのか。どのようなものか、改善点を考えながら階段製作へと移った。問題点は、土間と階段の一段目の段差が非常に大きく上がりにくいことである。この課題解決のためには、段差を小さくすることである。そこで、土間にもう一段階段を設けることとした。単純な階段ではなく、階段にある踊場のような広いものとした方がいいという意見から、大きめの一段目の階段製作を行った。木工作業は、普段授業で行うことはほとんどないが、普段からものづくりに携わっている関係からか、苦勞なく製作できた。強度についてももしっかり考えており、丈夫なものとなった。

4-1-4 床の製作

解体現場から譲ってもらったインターロッキングブロックを洗って干したものを、実際に古民家に敷き詰めていった。最初はなかなか水平を保つことが難しく、凸凹ができてしまった。生徒たちのバリアフリーの意識は高く、課題解決を考えた活動なので水平を保つことにこだわり製作を行った。慣れるまではかなりの時間を要したが、慣れてくると時間は短縮され、無事敷き詰めることができた。インターロッキングブロックの敷き詰めが終わった後は、空間づくりについて考えた。古民家らしくなるために、和のイメージが強い関係もあり、インターロッキングブロックを敷き詰めた隙間には丸石を敷き詰め、雰囲気作りに工夫を凝らした。



写真1 ブロック敷き詰め作業

4-1-5 階段2の製作

土間の修復が終わり、インターロッキングブロックを敷き詰めた関係で、店舗入り口の段差が大きくなってしまった。もともと入り口にもバリアフリーの階段を設けることを考えていたが、改めて考え直すことと

した。考え直す最中に、譲渡会当日のオープン前に、宇部西高校福祉科の生徒とバリアフリーについて意見交換の場を設けることが決まった。スロープの製作も視野に入れていたが、階段を製作に切り替え、当日のバリアフリーの確保を優先することとした。その後、宇部西高校の生徒と意見交換をすることで、入り口のバリアフリー化に関しては、今後改善を図る方向で進めていくことにした。

4-1-6 バリアフリーの意見交換

バリアフリー化の活動は当日までかかった。インターロッキングブロックの床の最終作業と、ブロックが当たらない周りの部分には丸石を敷いて美しいものとした。活動の途中で宇部西高校の生徒と意見交換を行った。入り口の階段はスロープがよいのではないかという意見が出た。予想通りであった。どのような仕様がよいか、強度の問題や、どの方向にスロープを設けるのがよいのか、車いすの待機場所が必要であることなど、バリアフリーの考え方を学びながら、お互いの考えを伝えながら意見交換をし、改善の手立ての方向性を決めた。



写真2 完成の様子

4-1-7 商業科の取組を知る

譲渡会が始まり、工業科生徒も受付とアンケートの集計の手伝いを行った。当初予想していた以上に大盛況で、手伝いではあったが忙しいものであった。バリアフリー化の活動においては、本校商業科生徒も一緒に参加する場面もあり、互いの活動を知ることができた。

4-2 指導者から見た生徒像

工程1では、生徒の提案の一つをピックアップした。様々な意見が交わされる中で、階段製作の中でも、大目標のバリアフリー化についてももしっかり考えられており、広い視野を持っていた。さらに、積極的に意見交換がなされ、かなり当事者意識の高さが見受けられた。

工程2では、教員以外の大人との交流があった。生徒が業者の人に自然とインターロッキングブロックの技術について伺い、譲ってもらったものでどのように活用して活動を展開するかなど、業者の方々もしっかり説明していた。地域の方々と交流することは、自然と人とかかわる力が備わるものである。

工程3では、現地調査後の意見交換となった。それぞれの生徒が自分の考えをしっかり持っていたのでたくさん意見が出た。段差をなくすことを中心に考えていたが「どのような形でお客様が使うのか」「どうすればバリアフリーになるのか」など、視点を変えて考える様子が見受けられた。今までのものづくりにおいて、あまり発想しないことである。使う人のことを考えてのものづくりは、いつも以上に自分ごととして考えている様子が見受けられた。

工程4では、かなりの時間を要した。思っていた以上にブロックを水平に敷くこと難しかった。しかし、生徒たちは目的意識が高く、水平を保つために何度も作り直していた。一つのブロックが10kgくらいあるのでかなりの重労働であったが、最後まで作り切ったことはよかったと思う。また、ブロックが敷けない部分をどうするかについて、古民家らしく美しく見せるようにどうするかを考えていた。空間づくりというテーマも工業科の学びとしては意義深いものであった。

工程5では、インターロッキングブロックを敷いた関係で、入り口の段差がより大きくなってしまったので、予定していた設計を変更する必要が生じた。ちょうど同じタイミングで宇部西高校福祉科の生徒と意見を交換することも決まり、スロープの提案があるかもしれないから、今回はあえて階段製作を選択した。今後のバリアフリーの改善のためにも、今できることを形としてあるとよいのではないかという意見が一致した。この意見交換に関しては、先を見据えながら、そして、使う人のためを考えながらの意見であったことが見取れた。

工程6では、宇部西高校福祉科の生徒と意見交換を行った。宇部西高校の生徒は、私たち工業科の生徒が考えている以上に大きなことを考えていた。専門的な視点からいろいろ提案もあり、スロープの提案では、工業科の生徒が形状や材質の提案をしていたので、お互いが良い経験、良い学びになったと思われる。商業

科の生徒や宇部西高校の生徒の考え方の違いを強く感じた感想も耳にした。お互いの立場や視点の違いから、良いものを生み出すためにどうするか考えることは、今回の活動の中でもかなり力がついているのではないかと感じている。

最後に商業科の活動から、普段の工業科の活動では行えないことを体験できた。地域の方々と接する機会が普段以上に多かったため、コミュニケーション力が試された。実際のお客さんを目の前にした活動は、ものづくりの現場ではめったにないことでとてもいい経験になっていたと思われる。また、商業科の活動に協力しながら、作った階段をお客様が実際に使っている様子を見ることができて、自己有用感が芽生えていると感じた。

4-3 アンケートに見られる教育効果

今回の活動終了後、今回の活動に参加した本校工業科と商業科の生徒に、下記に示す2つのことについてアンケートを取った。アンケート集計結果から考察する。

1. 今回の活動からどのような力が育まれましたか。一番ついたと思われる力について◎をつけてください。

表2 アンケート1の内容と結果について

今回の活動で身についた力について	◎の割合 (%)
進んで参加する態度	16.7%
つながりを尊重する態度	11.0%
他者と協力する態度	16.7%
コミュニケーションを行う力	33.3%
多面的、総合的に考える力	5.6%
未来像を予想して計画を立てる力	16.7%
批判的に考える力	0%

2. 学科を越えた連携についてどう思いますか？

このことについては、工業科、商業科それぞれの生徒の言葉を抜粋する。生徒のアンケート結果については、原文に主旨が変わらないように加筆、修正を加えたものである。

○工業科

- ・連携活動は良い経験となった。ただものを作るだけでなく、どのように使ってもらうのがよいのか、どのようなものを作ってほしいのかをしっかりと理解することが重要であることを認識した。話し合いは重要である。
- ・バリアフリーの階段製作は、とても良い経験となった。実際に作ったものが使われるのを見るのは、正直うれしかった。ものづくりをする上で、使う人のことを考えるという大切さに気付いた。誰かのためになる活動はとても充実感があった。
- ・機械科はもっと今回のような活動が必要だと思う。目的意識があれば、作業の質はよくなると思う。自分たちのものづくりが何のために、誰のために必要なのかということを考えなければ、ものづくりもただの作業になってしまう。物を作ることがゴールではなく、使ってもらうまでがものづくりだと思う。その体験はとても刺激的でだった。

○商業科

- ・とても重要である。一つの専門学科のみではできることが限られてしまうが、複数の学科が協力することで、幅広い活動ができ、尚且つ質のいいものを提供できると考えられる。
- ・イベントに来てくださった方は、犬や猫目当てだったので、宇部西高校の福祉が関わっていることに気付いていない方が多く、残念に思った。こういう場で、少しでも福祉に関心を持つきっかけも作れたらよいと思った。
- ・よいと思います。それぞれの科の特色を生かして連携することによって、自身の成長はもちろん、他の分野についても知るができるよい機会になると思う。

4-4 考察

1. のアンケート結果については仮説を立てていた。行動の様子から「進んで参加する態度」が一番◎がつくと予想していた。しかし結果は、コミュニケーションを行う力、進んで参加する態度・他者と協力する態度という順番であった。生徒たちはコミュニケーション力をつけることの意識は高い。特に三年生は、就職や進学面接試験を意識しているからこそではないかと考察する。

違う視点からの見立てとして、この7つの力については、筆者が「高校生の間につけたい力」である汎用的能力を言葉に示したものである。筆者が展開する活動は、基本的に生徒主体の活動で、本当に必要がない限りは手を差し伸べない。このように書き示すと、何もしないで手を抜いていると思われがちである。真意としては、どのような活動を展開するにおいても、活動の企画立案、活動計画、活動実行は生徒たちが行わなければ自分事の活動にならない。活動の企画立案、活動計画、活動実行の3本柱がとても重要で「多面的、総合的に考える力」「未来を予想して計画を立てる力」を効果的に養うことができる。この2つの力は、普段の授業で養うのにはかなり手をかける必要があり、地域連携教育から得られる力の中ではとても重要なものとなる。この三本柱がぶれなければ、ある程度高校生の力で十分対応できる。活動の中で教員が行うことは、活動を承認すること、途中経過を把握し見守ることである。途中経過等の情報交換については、お互いが把握できるように、意見交換の場を多く設けるようにしている。その活動を承認することで、当事者意識は高まる。当事者意識をきちんと持たせないと、生徒自身が行っている活動をかなり難しいものと捉えてしまう危険はある。しかし、それを乗り切ればかなり力がつくと自負する。お互いの考えや気持ちを伝え合う機会を作り、承認することがとても重要となる。

今回のアンケート結果において、筆者が展開する活動において見えてきたことは、生徒自身がそれぞれ活動の中から得られた力が、それぞれ個々特有の結果となっているので、筆者の示したどの力においても関係性が深い活動になっているのではないかと考えられる。この活動を続けると平均的にそれぞれの力がつくことで、汎用的能力の向上へとつながるのではないかと。

2. のアンケート結果から工業科から特筆する点は、自分が製作したものが使われることを実感することが、新しいものづくりの視点の獲得につながっていることである。自分の作ったものが使われているのを見ると、自己有用感がくすぐられている。そこから次のステップとして、自分が作ったものの完成度を上げる必要性（安全面や、使う人のニーズに応えるものづくりなど）を感じる。このことから、ものづくりの意識はかなり向上していると言える。その手立てとして、ものづくりの過程の中で、お互いの考えを理解しながら、同じ方向性を持って課題解決に臨むための話し合いの重要性を感じ、一つのものを作っていく過程を経験したことはとても大きいことである。工業科における課題研究の授業において、どの学校もいいものを作っているが、そのものがどのように使われているか、使っている人の声を聴く場面が少ないことなどは、改善点である。くわしくは、5-3の成果と課題で述べることにする。

商業科のアンケート結果においても触れる。商業科の生徒は地域の方々と接する機会が多く、コミュニケーション力は高い。今回の活動で、工業科の生徒と意見交換する機会を持つことで、考え方が違うことを実感している生徒が多いことが分かった。連携することで、「新しいことが生まれること」「お互いの得意分野が生かせることで活動自体がいいものとなっていること」「連携することでお互いの普段の学びを知ることができること」などが、アンケート結果から得られた。

以上から、商工連携の必要性をアンケート結果から生徒たちも感じていることが分かった。お互いの良さが発揮できるような取り組みの準備を行うことが次の課題となる。では、どのような活動が必要となるのか、次の章で筆者が考える商工連携モデルを紹介する。

5. 商工連携モデルについて

5-1 モデルの考え方

今回のような活動を展開するためには、どうすればよいか。カリキュラム化を見据えた基本的な考え方として、

- ・時間共有ができる準備が必要であること
- ・活動の内容について、共通するテーマが必要であること
- ・その活動が地域に出て活動すること

の3点が挙げられる。

時間共有ができるためには、年度当初に各クラスの間制作の際に、工業科と商業科の生徒が交流することができるためにコマ割りを準備する必要がある。今回のモデルでは、工業科と商業科の3年生が連携できるように、工業科は「課題研究」の授業を、商業科は「総合実践」の授業で連携を図り時間割を工夫した。

活動内容については、工業科と商業科が共通のテーマを掲げ、実際にどのような形で連携を図るのか、しっかり目的を明白にしなければ、良い活動にはならない。最初の立ち上げの段階から、積極的に意見を交わしながら連携モデルと一緒に構築していくことが重要となる。最終目標は、工業科、商業科がそれぞれの学科の特性を活かし、お互いに課題が見つかった際に、自然と連携できることである。そして、共通の課題認識からお互いの考えを共有しながら課題解決につながる活動を目指す。常日頃互いに連携する必要はなく、必要が生じた際に連携を図り、それぞれの活動の質を向上させることが重要である。

5-2 モデルの特長

5-1で説明したことを基にモデル化したものを示す。このモデルを考えた際に「どのような活動が必要となるのか」という点に重点を置き、モデル化した。実際に考えたことは、

- ①今までの既存の活動や過去に行っていた活動から、工業科、商業科がつながるものを模索すること
- ②この活動が、防府の地域資源を利用した活動とすること
- ③工業科、商業科それぞれの特色を活かした活動とすること
- ④最初の活動は、しっかり仕込まれたものとする

の4点である。

①は、カリキュラム作りにおいて「新しいことを始める＝仕事が増える」と感じないようにしたいと考えた。何もないところから新しい活動を準備することは、とてもエネルギーが必要となる。

今までの活動の延長上であれば、指導者の負担感は解消できる。実際の活動では、指導者が中心となり指導するのではなく、地域の方に生徒たちを預ける形にしていきたいと考えている。この形をとることが、指導者の負担軽減につながる。さらに、既存の活動の点検や過去の活動の振り返りを行った。すると、ある共通点を見つけることができた。それは、工業科、商業科がそれぞれ方向性は違うものの「鋳物」についての活動を行っている、行っていたことが分かった。工業科においては、2018年に一年間を通して企業インターンシップを課外活動として行っていた。連携企業の社長を中心に鋳物から新しい製品を作り、販売した経緯があった。しかし、その活動の継続が難しくなってしまう、活動自体が無くなってしまった。改めて社長と会い、また活動を一緒に行いたいと依頼すると一つ返事でご了承いただいた。このことがきっかけで、工業科として改めて鋳物の活動を始めた。商業科は今後、社長と鋳物を使った商品開発を「総合実践」の授業で活動を展開する。

このような背景があり、「鋳物」をテーマとすることを決めた。工業科・商業科の授業で、同じ企業の社長が先生として指導にあたってくれることで、地域に出て学ぶことができる。それぞれの学科の特性を活かしながら、それぞれの視点で活動を行い、連携する場面ができれば、意見交換をしながら教育効果を上げていくことができることが想像できる。

②は、地域資源を大切にしたい地域連携教育を展開したい。筆者はこの点において、一番重要視したいと考えている。筆者の活動を共に考え、協力してくれている商業科の先輩教員もこの連携について賛同している。筆者は工業科教員なので、商業科の学びについても学ぶ必要があり、指導を仰ぎながら活動を協働している。商業科は「コミュニティづくり」を大切にしている活動を展開している。地元を活性化させることを学ぶことはとても重要で、今後の防府の在り方を地域に出て、肌で感じ、活動を展開している。筆者も同様な考えを持っており、専門高校の生徒もそうであるが、特に工業科の生徒はほとんど就職し、本校は特に地元就職の割合



図2 商工連携モデル

が高いことから、地元根付いた学校づくりが必要であると考えている。地元を学び、地元を大切に。地元で活躍する生徒たちを育てることが、今後の専門高校の在り方にもつながると自負する。

話は逸れたが、「鋳物」から学べることは、工業科視点より、

- ・鋳物の歴史から防府の歴史を学び、防府の良さを知り、伝えること
- ・鋳物の技術を学び、今後のものづくりについて考えること

などが考えられる。「鋳物」の技術から、防府の歴史から防府の良さを伝え、地元愛を育みたい。防府市の施策で「教育のまち」を掲げており、防府天満宮を中心に歴史を中心とした学びについての活動も展開されており、防府市と協力しながら活動ができないか模索していく。また、鋳物の技術は、今後の社会基盤づくりに必要であることを学んでいる。SDG sの観点からサステナブルな社会づくりについても提案できる技術である。そして、実際に鋳込む作業を小・中学生に実際に見てもらい、鋳物の技術や良さを伝えてく活動を展開したい。小・中学校連携においては、地元根付いた学校づくりを目指す筆者にとってとても重要な活動である。

③④については、今年度「長州鋳物記念館」が設立され、「学びの空間の提供」をテーマに活動が展開されている。工業科としては、鋳物体験コーナーを企画運営に携わることや、商業科が企画した鋳物の商品開発と一緒に考え製作に携わること考えている。実際のお客様の前で商品発表会を行い、その後新商品の製作を実演し、最後に商品販売を工業科・商業科と一緒にやって行く。そして、このような活動を考えながら、お客様を呼ぶための空間づくりは、工業科を中心に手掛けていきたい。実際に社長ともこのような話を進めており、現在計画之中である。それぞれの生徒の特長を社長が把握しており、それぞれの視点から活動を提案し下支えしていただいている。生徒と社長主導で活動が展開されており、指導者の負担も軽減していると思われる。

5-3 成果と課題

成果は、防府の地域資源である「鋳物」をテーマとして活動の展開を準備できたことである。「鋳物」について連携する班もあれば、他のテーマが生まれ、そのテーマについて連携するお互いの班が決まり、自然と、各活動について連携出来ていくという一連の方向付けができたことである。このような活動を実現させるためにも無理なく継続できることを考えていかなければならない。

課題は、今回の取組や商工モデルを考えていく経緯から、工業科の授業「課題研究」の取組について言及したい。今の活動に変化が必要である。そこで、改善点を表に示す。

表3 工業科授業「課題研究」改善点について

①「ものづくり」だけで終わっている点
②生徒主導のテーマづくりでない点
③地域に出て活動を展開する必要性について理解する点
④できれば、一年間で完結する活動が良いという点
⑤活動の集大成として、活動を発表する場が必要であるという点

①では、工業科において「ものづくり」のテーマは外せない。「ものづくり」に特化して活動を展開することはとても良いことである。しかし、大半の活動はただものを作って終わりになっている。先に述べた高校生の間につけておきたい力である「人とかかわる力である汎用性能力」を向上させるための活動においては、ものを作って終わるだけでは身につかない。今回の活動から、生徒自身が自分たちの作ったものを実際に使ってもらうところを体験したことで、たくさんのことを考え、感じていたことが分かった。このような活動を、課題研究で取り入れられるようにしたい。

②は、工業高校の課題研究は、学校側が用意できるテーマを提示して、生徒の希望を聞き班活動とすることが多く、ある程度活動が決まっている。テーマが準備されている中でも、生徒たちの自主的な活動につながる準備をする必要がある。その点の工夫は必要である。課題決定から生徒が自主的に決めることができることがベストであると考えられる。

③では、①で考察したことをどのように展開するとよいかを考えると「地域に出て活動すること」とおのずと答えが出てくる。生徒たちが製作したものを披露する場や実際に使ってもらえる場を設ける必要があるからである。せっかく作ったものがどこかで、誰かのために活躍することを目の当たりにすることで、自己

有用感を向上させることができる。また、ものづくりについて使ってもらう人の意見をもらうことはとても重要なことで、ニーズに答えるための課題解決に向けての活動はとても重要となる。このような活動は、生徒の主体的な活動から人とかかわる力である汎用的能力を育てることができ、職業観を育てることもつながる。そのための活動を展開するための手立てが必要である。

④では、今現在の課題研究のほとんどが地域に出ることなく、ものづくりに特化している点であることから感じたことである。ものづくりを完結しないで途中で終わった場合は、達成感も得られず、ただ作っただけの印象を持ってしまう。最後まで完成できるように、指導者として対応していかなければならない。もちろん、この課題研究の活動が、積極的な活動で、後輩がぜひこの活動を継続したいというものであれば問題ない。しかし、大半は先生方の得意分野の関係で継続しているものがほとんどである。毎年違う生徒たちが行いたいことができる場であるほうが、高校生までに育てたい力には直結する。

⑤では、自分たちの活動を発信する場が必要である。学習指導要領解説工業編において、年間計画のモデルを示していることもあり、事前指導 → 学習展開 → まとめ、評価 の流れが主流となっている。まとめの段階において、自分たちの活動を発表する機会を設ける必要がある。その機会が校内だけでなく、地域の方や他校の生徒たちが聞けるような会を準備する。そして、成果発表会は規模が大きければ大きいほど良い。高校生の間にこのような場を設けて発表する経験は今後活きる。自発的に自分の意見を発表することまでが、課題研究の授業の意義である。

おわりに

今後はこのモデルを軸に商工連携を積極的に行っていきたい。それと同時に、本校のように専門学科が併設する高校の連携において他の専門高校に伝えていく活動をしたいと考えている。各高校の特色を活かしたテーマ型コミュニティ・スクールの活動をどのように展開していくかをしっかり考えていく必要がある。山口県は他県に比べて専門高校の割合が高い県であり、この特徴を活かしテーマ型コミュニティ・スクールの取組から地域に根差した高校づくりを展開していくことが良いのではないかと考える。専門高校生の大半は就職を希望し、山口県で就職する割合も高い。地元に残るが、地元を知らないとなると地元にとっては宝の持ち腐れとなってしまう。高校生から地域とともに連携を図りながら学びを深めることで、地元愛を育むこと、地域とのつながりの重要性を知ることなど、高校生にとって学びに直結する地域連携教育は、今後生きていくために必要となる資質・能力を育むことにつながる。

また、地域連携教育が高校生のつきたい力に直結しているものとなっているかの検証においても、引き続き行っていく必要がある。このことを怠って連携することだけを目的としてはいけないことを強く示したい。活動が生徒自身の学びにつながらなければならない。何故この活動が必要なのか、何故連携する必要があるのか。何故を考えずして施策だけが独り歩きすることのないようにしたいものである。

地域連携教育は、今からどんどん広がりを見せていく。その活動が高校生の学びにつながり、地域とともに発展できるように、筆者自身も努力を重ねる所存である。

参考文献

山口県教育委員会：『山口県教育推進の手引き』，2020.

田原恭蔵：「工業高校『課題研究』授業の現状と意義」『帝塚山短期大学紀要．人文・社会科学編・自然科学編』，1996.

寛裕介：『持続可能な地域のつくり方 未来を育む「人と経済の生態系」のデザイン』，英治出版，2019.

溝上慎一：『アクティブラーニング型授業の基本形と生徒の身体性』，東信堂，2018.

溝上慎一：『学習とパーソナリティ「あの子はおとなしいけど成績はいいんですね！」をどう見るか』，東信堂，2018.